

工事中の中知床岬燈臺

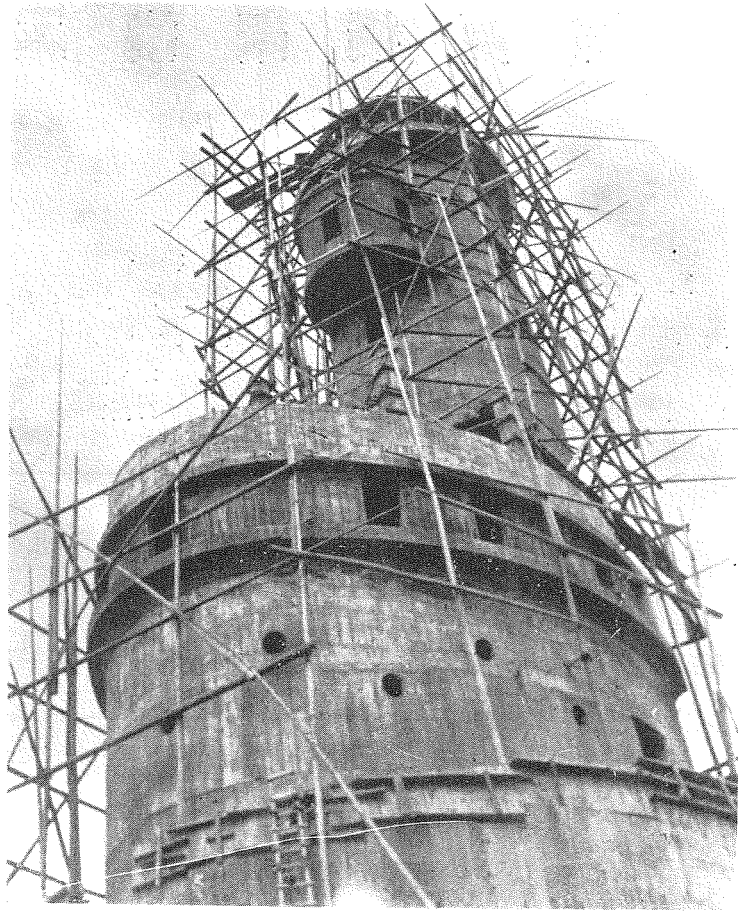
逓信省燈臺局工務課長

森 田 富 士 助

本燈臺は樺太の絶壁続く知床半島の尖端然も高さ四丈餘の五丈岩と呼ばるゝ常に波洗ふ岩礁上に三ヶ年繼續で昨年六月起工し、明年度を以て竣工の豫定で目下當局の手で直營施工して居るものである。

現場は敷地狭少で燈臺を建てる以外には材料を置く餘地もなく、草一本生へず飲む水もなくあまつさへ時化ともなれば容赦なく激浪の襲ふこととて危険のため住ふことが出来ぬから止むを得ず敢へて不便を忍び四漣離れた作業根據地より毎日渡海工事をしたもので

ある。そして毎朝作業船に乗つて現場へ近づくとき空には數千の海鳥が舞ひ上り岩礁上には數百の海馬、海豹が安住の地を守らんとしてか一揃ひ怒號するが所詮人間には敵ふべくもなく結局は海中へ飛び込み逃去ると同時にスコップ持つ者等が入替つて岩上を支配するのである。之れが建設中作業員は濃霧に妨げられて海上を迷ふたり風波と闘つては發動機船や舢舨など沈没せしめられたり又毎回激浪の爲材料を流失したり其他枚擧に遑なき苦勞を重ねたものであるが之れが落成までには尙相



當の困難に遭遇することであらう。

本臺は第三等級で燈塔は圓形、下方は附屬室と一體になつた楕圓形とし高さは海面上より燈火の中心まで四十米あつて鐵筋コンクリート造、耐浪的設備となし外部は黑白横線塗となる。地下室には野油庫、冷却水槽、飲料貯水池、野菜庫等、一階はエンジン室、蓄電池室等、二階は通信事務室、居間、炊事場、洗面脱衣室、浴室、便所、食糧庫、物置等、三階は傭人寢室(四人分)四並に五階は職員寢室(八人分)、六階は貯氣罐サイレン室、七階

は貯油室、八階は回轉機械室、九階は燈籠とよりなり、之れが完成の暁には比處より十五哩離る、札幌陸地官舎より船で職員が月數回交替勤務となるものであるが燈火は光力十一萬燭光の連閃白光とし十八秒を距て、六秒間に二閃光の光芒を遠く十七哩半の彼方まで投げ掛け且濃霧襲來の際は空氣壓搾式のサイレンを吹鳴したりなどして久しく待望されて居た支けに北方生命線に活躍する諸船舶の良き指針となり北進日本の國策に貢獻するところ少くないであらう。